カイコに学ぶ

秋山　幸也
※相模原市立博物館学芸員

その14
カイコに近い野生の蛾
クワコ

1 カイコと同じ祖先を持つ野生種

　カイコのためにクワの葉を取ってくると、カイコと形のよく似た小さなイモムシがついていることがあります。

　これは「クワコ」という野生の蛾（が）で、カイコと同じ祖先を持つと言われています。

　カイコと同じようにクワの葉を食べて育ちますが、色はカイコよりも濃い模様があり、幼虫も成虫（右写真）も少しほっそりしています。そして、野生の蛾なので、成虫は飛ぶことができます。

クワコの成虫

2 擬態その①（1～4齢まで）

　クワコは昼間あまり活動せず、葉の上などでじっとしています。4齢幼虫までは、体が白黒のまだら模様です（右写真）。これは鳥のフンへの擬態（ぎたい）※です。

　ほかの蛾やチョウでも知られていて、例えばアゲハチョウも同じような擬態をします。葉の上で、わざわざ体をUの字に丸めて姿勢まで似せていることもあります。

アゲハの幼虫

クワコの幼虫

※ 擬態（ぎたい）：天敵（てんてき）にとって危険（きけん）を感じる生物や、獲物（えもの）に見えないものなどに体を似（に）せて身を守ること。

3 擬態その②

クワコはカイコほど大きく育ちませんが、さすがに終齢（5 齢）になると、大きすぎて鳥のフンに擬態するのは無理があります。そこで今度は、クワの枝に擬態するのです。

右上の写真を見て、すぐにクワコがどこにいるかわかるでしょうか。その気で写真を見ればわかると思いますが、野外では簡単には見つけられません。枝の色だけでなく、枝にとまる角度や模様、質感までそっくりの見事な擬態です。

それだけではありません。枝に擬態したクワコを見つけたら、ちょっといたずらをして、頭をつついてみます。すると、頭を下に下げて、眼状紋（がんじょうもん）を突き出すように見せます（右中写真）。この目玉模様は、鳥を驚かせるための擬態と考えられています。人間から見るとちょっとユーモラスに見えてしまいますが、クワコにとっては命がけの最終手段です。

さて、カイコを思い出してみましょう。カイコも 3 齢くらいまでは、黒っぽいまだら模様が目立ちますし、終齢になると、眼状紋がはっきりとしてきます。こうした特徴は、実は野生の名残といえるものだったのです。

※左上の枝にクワコの幼虫がいます

4 繭は小さめ

クワコの繭は、葉の裏や枝の間などに作られます（右写真）。カイコと比べると小さくて薄く、弱々しく見えます。でも、自然界で身を守るのに必要最小限のものなのでしょう。色もうすい黄緑色で、葉にまぎれるような保護色※となっています。この繭を見て、繊維を取り出そうとした昔の人の発想もまたすごいですね。

※ 保護色（ほごしょく）：生物が天敵に見つかりにくいよう、背景（はいけい）と見分けがつきにくくなっている状態（じょうたい）の体の色や模様（もよう）。